

Eureka VII

六年制通信 No.25 令和2年11月20日(金)号

自分を信頼すること

アメリカの哲学者にエマソン (Ralph Waldo Emerson 1803-1882) という人がいます。「何を食べてきたのかを思い出せないように、何を読んできたのかももう忘れたが、それが私を作っている」と言った人です。彼がセルフ・コンフィデンス(Self-Confidence 自らを信頼すること)という本の中で、若者の可能性について触れていますので紹介しましょう。まず前置きとして、人をうらやむことは愚の骨頂であると言っています。人をうらやむ嫉妬の感情はロクなものではないと古来様々な書物に書いてありますが、エマソンもまた同じことを言っています。それから次のように述べています。「自分のうちに宿っている力は造化未発(ぞうかみはつ)の新たな力(まだ現れていない力のこと)であって自分が何をなしうるかは自分以外には誰も知る由もないばかりか、自分自身さえも、やった後にはじめて知りうるだけだ」と。これを解釈してみると、つまり自分の力は自分でもよくわからないものなのだから、若いうちに、まだやってもいいうちに、自分には力がない、能力がない、あれもできないこれもできないなどとレッテルを貼ってはいけないという意味だと思います。人は自分に宿る力に気づいていないというのは、君たちを見ていてよく思うことです。勉強に関してもそう思います。君たちは自分でできると判断したものには取り組みますね。やろうとします。しかし、難しいものに時間をかけて取り組むことは避けていると思います。そういう気持ちはみんな持っているのですが、若いうちは特に「自分を鍛える」視点を持たないといけません。簡単なこと、気楽なこと、すぐできること、英語で言うイージー(easy)なことは入っていきやすいのですが、やってみたところで得るものは少ないのです。困難なこと、時間のかかること、これを英語でタフ(tough)と言いますが、このタフなことに取り組んでこそ多くを学ぶのだと思います。

君たちは、これは自分には無理だということをよく口にします。できないということを簡単に言うように思えます。しかし、おそらくその対象の多くは、できるようになるまでには時間がかかりそうだったり、すぐには理解できなそうだったり、あるいはしたくなかったりするもので、よく考えてみればそういう気持ちに支配され、「挑む前の挫折」をしているだけではないでしょうか。小さな挫折を積み重ねると人は必ず自信をなくしていきます。逆に、小さなガッツポーズを積み重ねていくと私たちは自信を持つようになります。小テストなどはそのいい材料です。10点、20点のテストでも何度もガッツポーズを経験すれば、その成功体験が習慣となっていきます。また、学業に限らず日常の中には小さなガッツポーズのチャンスはいくらでもあるはずです。

一方、小さな挫折がなぜ起こるかといえば、理由は極めて明白、途中でやめるからです。小テストでも何でも最初から自分でできる範囲を決めてしまうからです。これくらいでいいと高を括ってしまうからです。本当はその先にタフなことが待っていることを実はよく知っているからこそ、タフなレベルまで自分を追い込まないようにしているのです。本当に理解するまで向き合っていないだけです。適当にわかった気になっている状態は最も危険です。ある程度の理解力のある人が一番危険なのです。なぜなら、そういう人には反省がないからです。うまくいかなかったとき、反省より先に言い訳が浮かんでしまうからです。本当はわかっていたのだ…という言い訳が君の進歩を妨げます。このことは言葉以上に恐ろしいことだと思って下さい。

これは何で読んだか忘れましたが「どうせ時間は経つのだ」という言葉がありました。ぞっとする言葉ですが、これは真実だし、だからこそ、今自分の行っていることに意義を見つけるべきです。過ぎていく時間を意義あることに没頭して使うべきでしょう。君たちにとって、若者にとって意義あることは目の前にあるタフなことに取り組むことです。同じ1時間を気楽に過ごすか、他者に嫉妬して過ごすか、何かに取り組んで過ごすか、考えて悩んで過ごすか、それは自分の力を信頼するかどうかにかかっていると思います。自分の未発の力を信じて頑張りましょう。途中でその力を萎ませるように舵をきってはいけません。舵をきるのも君の選択です。誰の強制でもありません。全ては自分の手の中であって、自分で選択できる。それを恐怖とを感じるか、幸せと思うか。そしてそれもまた、君が自分で決められることです。

今週のおすすめ

- ・ 内館牧子 『カネを積まれても使いたくない日本語』 (朝日新書)

よくぞ書いて下さいました。昔から大人は若者の使う流行り言葉が嫌いなものですが、話し言葉は時代とともに変化していくのだからと「大らかな許容の果てに」、油断していたらとんでもなく言葉に品がなくなってきた。そう著者は嘆き、怒っています。それで、若者だけでなく中年あるいは老人までもが使うおかしい表現を取り上げ、仕返しとばかりに実に品のないタイトルの本を書いたわけです。著者は行き過ぎに警鐘を鳴らしています。例えば「ら抜き言葉」への批判というより、それが「まさか、僕が出れるとは…」という言い方にまで逸脱するのは容認できない、しかも品がないと評しているのだと思います。「～させていただく」は私の最も嫌いな表現ですが、時と場面によってはもちろん正しい日本語として運用されます。しかし、「検査を受けさせて頂き、他のメンバーとも相談させて頂き、治療に専念させて頂くことにさせていただきます」となってくると、薄気味悪くなってきます。私も「素晴らしいことだと思わせて頂いたところですが…」という発言を耳にしたことがあります。慇懃無礼な態度と物言いを続ける人でしたが、まあ品はないですわな。

著者は色んなアンケートをしています。テレビに流れる日本語に「気になる」と答えた人が案外多かったのは嬉しかったな。私も気になって仕方ない。これも歳をとったからだと諦めていましたが、この本を読んで私の一回り年上の著者が私以上に怒っているのを知ってホッとしました。また、反省もしました。「知らなさそう」と言っていたような気がする。「知らなさそう」ですよ、正しくは。

BGMは 井上陽水 の 心もよう でした…。